

Close Up **老健**

介護老人保健施設豊松苑

山口県下関市

実績と信頼を地道に積み重ね 「認知症ケアといえは」といわれる施設に

下関市は、山口県西部、本州最西端に位置する県内最大の都市である。三方を海に囲まれ、古くから港町として栄えてきた。関門海峡の対岸は福岡県北九州市。利便性のある都会と豊かな自然が共存するバランスのよさも魅力だ。

早春の頃、そんな下関を訪ね、老健施設「豊松苑」(医療法人水の木会。水木寛^{ゆたか}理事長。入所：50名)取材した。



母体の精神科病院の受け皿としてスタート 開設後しばらくは長期入所施設に

下関市は、わが国の歴史における幾多の重要な出来事の舞台となったまちとしても知られる。古くは壇ノ浦の戦い、巖流島^{がんりゅうじま}での宮本武蔵・佐々木小次郎の決闘。近年では長州藩と欧米連合軍との下関戦争、日清戦争の講和条約が締結されたのもここ下関である。市内には歴史の見どころが多く点在することから、観光地としても人気は高い。また、下関といえば全国随一の「ふぐの聖地」。特に冬はにぎわう。

関門海峡を挟み、対岸の北九州市門司区へは距離にして約780m。関門トンネル人道を利用し、徒歩でも片道約15分というアクセスのよさから、両市の経済・文化的つながりは深い。買い物や娯楽、通勤・通学での人々の両市への行き来も日常的に行われ、実際、北九州エリアから当施設に通勤している職員もいる。1つの生活圏を形成しているといってもいいだろう。

そんなこの地に、現理事長の祖父が母体法人の精神科病院「下関病院」を開設したのは、1954年。50床の小さな病院からスタートし、現在は300床。同病院を中心に、周辺には付属の地域診療クリニックのほか、老健施設「豊松苑」を含む介護・福祉施設が複数集まる。同法人は近年、同じ県内の萩エリアでも「萩病院」を核とし、介護・福祉サービス事業を展開している。

「私は2016年に4代目の理事長に就任しました。当施設は2代目理事長が1992年に設立。母体病院の退院後から在宅復帰までにワンクッションを置くための受け皿という目的で開設されました。ただ、実際には在宅復帰はなかなか難しく、開設後しばらくは長期入



水木理事長

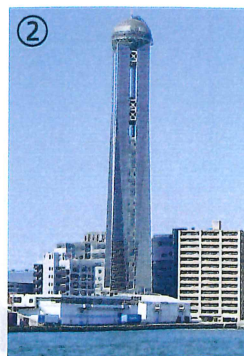
所者ばかりとなっていたようです」と、水木理事長は当時の様子を話す。

もっとも、同施設としては、やむを得ない事情があった。母体の精神科病院から引き受ける入所者は、家族からも敬遠され、行き場のないような重度の精神疾患、認知症（当時は「痴呆」と呼ばれていた）の方ばかり。必然的に“長期入所施設”状態は、しばらくの間、続くこととなる。

同施設に改革の動きが出始めたのは、開設後10年が過ぎようとしていた頃だった。変革の鍵を握ったのは、作業療法士の江藤竜一副施設長だ。

「当時の理事長と事務長から、県外の別の老健施設で働いていた私に“病院と在宅をつなぐ中間施設という本来の老健施設に戻したい。力を貸してくれないか”と、お声がけいただいたのが、きっかけでした。一作業療法士として入職したのが、いまから約20年前、2001年のことです」と、江藤副施設長。

法人としても、老健施設本来の理念と役割とは真逆の施設運営を、なんとかしなければと忸怩たる思いを



①施設からも近い「綾羅木郷（あやらぎごう）遺跡」。一帯は公園になっており、園内には復元された古墳や竪穴住居がある。②下関のシンボル「海峡ゆめタワー」。③関門海峡に浮かぶ周囲約1.6kmの小島「巖流島」。④巖流島で繰り広げられた剣豪、宮本武蔵・佐々木小次郎の決闘の様子を再現した像。

抱いていたのだろうと想像する。

現在、同施設は超強化型の算定を2018年8月より維持。直近のポイントは79で、指標すべての項目で高い数字を獲得している。しかしながら、ここまでの道のりは、決して平坦ではなかった。

職員の意識改革と家族からの信頼獲得へ 年単位の辛抱強い改革を実践

「いまだから言ってしまいますが、入職前に当施設を見学したとき、“ここは本当に老健施設?”と目を疑い、衝撃を受けたのを覚えています。当時は、施設内でも身体拘束が行われていましたし、鎮静剤によりあまり元気がないご利用者もいらっしゃいました。当時、リハビリ専門職はおらず、現場職員たちも、たぶんここがリハビリ施設なのだと認識はなかったのではないのでしょうか。驚きましたが、同時にこの状況をなんとかしたい、という使命感のようなものを抱きました」と、江藤副施設長は振り返る。

法人トップや事務長からの命を受けたとはいえ、最初はまさに孤立無援で、施設のなかに1人だけ異分子が来たという状況だった。リハビリをしようとしても、現場の看護・介護職たちからの理解や協力はなかなか得られなかったという。

「志を同じくする仲間をつくらないことには、1人では何もできないと痛感しました。まずは当時、介護主任を兼務していた施設ケアマネジャーに積極的に働きかけることにしました。ケアには幅広い観点からの介護計画が必要だと思い、個人的に興味をもって勉強していたことであったため、“老健施設におけるケアプランとは”という基本的なところから、ケアマネジャーと少しずつ考え方をすり合わせていきました」と、江藤



江藤副施設長



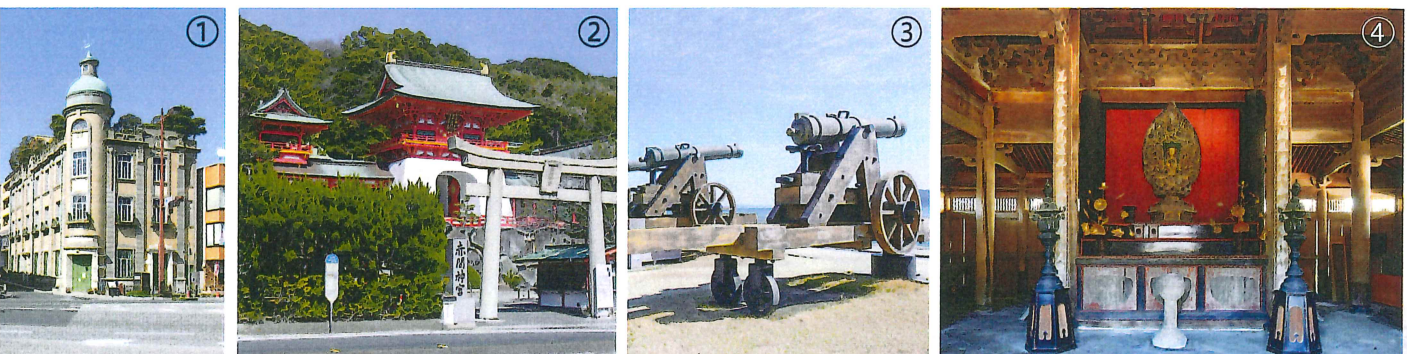
支援相談員の丸石さん

副施設長。

年単位の辛抱強い改革の始まりだった。それでも、拘束を解き、減薬に取り組み、認知症の周辺症状と向き合いながら辛抱強くリハビリをしていくことで、まったく動けなかった重度の方が、奇跡的に要支援のレベルまで回復するケースも出てきた。すると、その回復過程を遠巻きに見ていた職員たちも、少しずつ意識が変わっていく。社会的にも、施設での身体拘束廃止、精神科における薬剤処方の見直しの流れはますます加速し、それが追い風になった。

職員教育や組織体制づくりまでほぼすべての改革に着手し、江藤副施設長のケア方針がやがて施設の主流になっていった。独りから始まった改革。そこには並々ならぬ努力や苦労があったはずだ。

2009年に入職した支援相談員の丸石佳苗^{かなえ}さんは話す。「私が入職した頃にはもう、“できる限り在宅復帰をめざしていきましょう”との施設方針は現場に浸透していました。ただ、まだまだ実績は少ない状況で、自宅退所はほとんどなく、特養や居住系施設へ退所でできれば上々という感じ。ご自宅へ戻るのには、はなから無理だととらえているような雰囲気でした」。



①唐戸（からと）エリアは古くから栄えた港町。レトロモダンな建物が並ぶ。写真は「旧秋田商会ビル」。②壇ノ浦の戦いに敗れ入水した安徳天皇を祀る「赤間神宮」。パワースポットともいわれている。③関門橋のたもとに残る「壇ノ浦砲台跡」。港に向かい長州砲が並ぶ。④長府毛利家の菩提寺である「功山寺（こうざんじ）」の仏殿。鎌倉時代の代表的禅宗様建築で国宝に指定されている。

そこで、丸石さんが力を入れたのは、インテークだった。家族の協力が得られなければ、いつまでたっても在宅復帰はできないと考えたからである。

家族からの信頼獲得は一朝一夕でできたわけではない。元々、利用者は、在宅介護が難しくなり当施設に預けられている。在宅復帰のため退所前訪問をしたくても、ご家族には何度も拒否された。なんとか説得し、一時外出のため利用者とともに自宅を訪ねても、最初は職員はなかに入れてもらえなかった。

「それでも、ご本人だけご自宅に入ってもらい、いったん我々は施設に戻り、数時間後にまた迎えに行くなどしました。そうしたことを繰り返すなかで、ご家族にご本人の回復ぶりを見てもらい、“これなら家に戻っても大丈夫そうだ”と認めていただけるようになってからようやく、自宅での生活の相談をするようにしました。本当の意味での在宅復帰がこうして少しずつ実現するようになったんです」と、丸石さんは話す。

また、ご家族との信頼関係構築という点で、最近ではLINEを活用している。そもそも、仕事で忙しいご家族とは電話連絡がとりにくいため、情報伝達が十分にできないジレンマが常にあった。そこでLINEなら相手の都合を気にせず施設からの発信ができると考え、施設の公式LINEアカウントをつくり、キーパーソンとなるご家族に友だち登録してもらった。ご利用者の様子をご家族に伝えることができ、コロナ禍で面会が制限されるなかでも大いに活躍した。

4年前に支援相談員として入職した岡田真里子さんがLINEでのコミュニケーションの達人で、彼女の関与が大きな効果を生み出した。

「自分としては特別なことをしているつもりはないんですよ。ただ、相手をご家族だからと変にかしこまら



支援相談員の岡田さん

ケアマネジャーの
福田統括主任

ず、例えばご利用者の素敵な笑顔の写真が撮れたら、“見てください、いい感じでしょう？”とばかりにポンといきなり写真を送っちゃうんです。すると、それを見たご家族が“なかなか会いに行けないけど、母の笑顔が見れてよかった！”などとメッセージを返してくれる。そこからは、自然と会話がつかなくなっていきませんか」と、岡田さんは笑う。

「この笑顔と親しみやすさに、ご家族は自然と心を許し、思わずなんでも相談したくなるのだと思います。ときどき傍で聞いていると、“そんなことまで！”と思うようなことも、ご家族は彼女に話していますから」と、江藤副施設長が付け加える。

利用者のほとんどが認知症の方という同施設にとっては、家族対応はまさに肝なのだろう。そう考えると、なんとも頼もしい支援相談員たちである。

「認知症は高齢者の抱える疾患の1つ」 特別、大変だとは思わない

施設内を見せてもらう。そこにはごく普通にアットホームな温かいケア風景が広がる。

ケアマネジャーの福田由依子統括主任は話す。「私は2005年に介護福祉士として入職しましたが、確かに



① 1階ホールでの、体操の時間。職員の誘導に合わせ、上半身を動かす利用者たち。



② のんびりと足湯中。



③ 職員が身近にあるものを工夫して飾りつけた玄関フロア。



④ お参りの習慣のある利用者のために職員がつくったお地藏さん。



菊澤介護副主任

最初は驚きました。私にも老健施設には見えなかった。そこで、根気よく“これじゃいけないよ”と周りを説得し、ご利用者への接遇から変えていこうと呼びかけ、時間をかけて現場の雰囲気を変えていきました。でも、そうした経験があったからこそ、いまや我々が提供する認知症ケアは、どこにも負けないと自信をもって言える

までになったのだと思います」。

超強化型になって以降も、同施設は利用者のほぼ100%が認知症のある方だという。それは、他施設では断られるような重度の認知症の方を積極的に受け入れ、手厚いケアを行うという実績が地域の居宅ケアマネジャーに徐々に浸透し、「認知症なら豊松苑」という信頼が構築されていったからだ。

だからといって、同施設の認知症ケアに秘策があるわけではない。ただ、福田統括主任とともに認知症ケアにあたる菊澤佳子介護副主任の次の言葉から、なんとなくヒントがうかがえる。

「居宅のケアマネジャーさんから、事前に“ちょっと大変な方なんですけど…”と申し訳なさそうに言われることもよくあるんですよ。でも私、認知症だからって特に大変だと思ったことはないんですよ。認知症は特別なものではなくて、高齢者が抱える数ある疾患のうちの1つだと思って接しているんです」。

江藤副施設長もこう話す。「私もリハビリ専門職として、これが認知症リハビリだ、と胸を張れるようなことはしていません。ただ、病院と違い、老健施設は生活そのものがリハビリになるところが面白い。病院では決められた治療のプロトコルに従わなければ

なりません、老健施設はいろいろなことが自由にでき、しかも多職種が職域を超えて協働できる醍醐味があります。当施設の認知症ケアの強みをあえてあげるとしたら、職員たちがその醍醐味を理解した上で、自らも楽しんでケアにあたってくれているところでしょうか」。

直近では、職員を4つのグループに分け、各グループのリーダー（介護職）が、自分たちの得意なことでケアの独自性を出すやり方が、うまく回っている。

例えば、排せつケアに強いグループ、睡眠の質向上に力を入れるグループ、認知症のBPSD対応が得意なグループ、家族対応がうまいグループ、など。インテーク時に皆で話し合い、「この方は、あのグループに担当してもらうのがいいね」と、特性に合わせてグループを割り振っている。もちろん思いどおりにいかず失敗もあるが、「違ったら、また別の方法を探せばいい。そういう自由度があるのが老健施設だと思っています」（江藤副施設長）。

20年におよぶ改革を経て、提供するケアというソフトは整った。目下の課題は、開設31年目となる施設建物の老朽化といったハードの問題である。いわゆる“昔の病院然”とした無機質なつくりも、いまのケアにそぐわない部分があるのは否めない。

「これからは、地域で選ばれる老健施設として、中身だけでなく建物も時代のニーズに合ったものにしていかないといけない時代。建物の老朽化は、法人としても喫緊の課題であると認識しています。今後、認知症患者はますます増えていきます。病院ともども、当施設がこれからも認知症ケアを軸に地域の安全・安心をサポートできればと思っています」（水木理事長）。

同施設の次の展開が楽しみである。



①階段の壁には、各種委員会のスローガンが書かれた色彩豊かなPOPが貼ってある。殺風景な通路が少しでもにぎやかになるようにとの意図もある。②日差しで明るい個室。③個浴のできる浴室。在宅復帰に向けて個別の動作訓練を行う。